小説に見るラブシーンの表現

2010-7-20　　椎名 利(化工会)

最近、小説は読み手より書き手のほうが多いといわれている、創作ブームだ。

そのため『小説の書き方』的な『HOW　TO』ものが多く目につくが、創作の方法として言い古されている言葉に『小説を読んだ時、気に入った箇所を書きぬくこと』が、上達への道だとされている。

私も始めるにあたりこの言葉を実行しようと試みた。しかし、書き抜くだけでは後で見つけるのも大変だ。

そこで、”Access”を使って小説のデータベース化を思い立ち作成した。

ソフトの概要は次のようなデータで成り立っている。

① 題・著者

② 種類：純文学、エンターテイメント、歴史物など小説の分類。

③ 概要：大まかなストーリー。構造など

④ レトリック：気に入った箇所を書きぬき、タブをつける。

⑤ タブ：書き出し、ラスト、ラブシーンなどに分類してみだしとする。

⑥ 賞：芥川賞など

小説のデータベースのメインメニュー

この結果は次のように整理される。

① 作品ごとに概要、レトリック（書きぬいた箇所）が一括されて表示される。
（後でこれを見ることにより、読んだ時のイメージを再現できる）

② レトリックが著者ごと、タブの分類ごとに検索できる。
（同じようなシーンの作家による違いを比較できる。また、書くときに文例として参考になる）

さて実際の効用をお目にかけよう。作家別の『ラブシーン』の表現を拾ってみた。

作家によりどのように違うかみてほしい。『ラブシーン』の表現では、かなり際どいのもある。純文学の著名な作家と言えども、わがホームページの品性を落とすような文章は望ましくない。

男女の作家で差があるが、一般的に男性のほうが抽象的なものが多く、女性のほうが直接的、具体的なものが多い。これは男女の感性の違いにあると思われる。つまり、男性はフィテッシュ（間接的なものにもエロスを感じる。女性の下着で興奮すること、チラリズムに弱いことなど）なので抽象的なものでも満足できるのだろうか。

以下、実例として『ラブシーンの表現』を見ていただきたい。

ラブシーンの表現

◆ 書かずにすませるすごさ。

『十三年』　　山川 方夫

僕は、戦争直後の中学時代、『好文社』で貸し本のアルバイトをした。本を読めることが楽しみでしたのだが、疎開先の彼の家から学校に通うのに二時間もかかるので、店の店主頼子の勧めで貸し本屋の二階に住み込んでいた。ある宵、僕の部屋を頼子が訪れた。行為の後、僕はわけのわからない恐怖に襲われ、二度と頼子の店に行かなかった。

後日、喫茶店で頼子を見かける……。

喫茶店で友人を待つ彼は、窓際の子供づれの上品な和服姿、視線にとまどっていた。歳は四〇ぐらい。子供は、一二、三歳だろうか。父親でも待っているのだろう。不意に「頼子だ」と思い出すと、戦争直後、『好文社』で貸し本のアルバイトをした中学時代を思い出した。本を読めることが楽しみでしたのだが、疎開先の彼の家から学校に通うのに二時間もかかるので、頼子の勧めで貸し本屋の二階に住み込んでいた。

バラックの貸本屋の屋根裏、二畳ほどの彼にあたえられた部屋の中に、ふいに頼子があらわれたのは、その年の秋、停電の夜半だった。目がさめると、もう頼子の姿はなかった。しかし、はじめての経験の記憶はあまりにもなまなましく、わけのわからない恐怖が彼をおそっていた。後はその日荷物をまとめ店を出ると、二度と店には行かなかった。ただ、逃げねば、とだけ思いつづけていた。

遠くから見ると少女の肩に自分と同じような痣がある。彼は頼子のテーブルに歩み寄り、彼女と少女に交互に目をやりながら「お嬢さん？」と聞き、肩を見るとそれは光の影だった。彼女が「ちょうど十になるの」と答える。

数分後、彼が友人と一緒に喫茶店を出て行くのを、女はしずかな笑顔で目送した。

「ねえ、ママ」

すると、それまでおずおずと黙りつづけていた少女は、さも不服そうな声で女にいった。

「ママったら、いやだわ。私もう十二じゃない。どうしてまちがえたの？」

女は、答えずに、おだやかな微笑のまま目をまた扉に向けた。そのときガラスの扉がひらいて、デパートの包みをかかえた一人の中年の男が店に入ってきた。

「さ、パパがいらっしゃったわ」と、女はいった。

「パパ！」と、少女が叫んだ。

胸いっぱいに紙包みをかかえた男は、相好をくずしてそのテーブルに歩み寄った。男は、左脚をかるく引きずるようにしていた。

◆ 文章は格調です。

『春の雪』　　三島 由紀夫

三島の遺作『豊饒の海』四部作の第一巻。輪廻転生を軸に展開される物語、恋愛小説の白眉。

昭和の初め、松枝侯爵の長男清顕は幼馴染の聡子に惹かれながらも、姉的な行動をとる彼女に素直になれず父親の再三の確認にも関わらず、聡子への恋心を偽り、宮家との結婚に賛意を示す。しかし、宮家との婚約の勅令が出ると恋情に火がつき、聡子を求め逢引を重ねるが、やがて彼女は妊娠する。ことは、宮家に関することだけに秘密裏に堕胎が行われ、聡子は精神に異常をきしたとして婚約を解消し尼寺に入る。その彼女を追って寺を訪ねた清顕は会こともかなわず、やがて暮れの寒さから肺炎を患い、

「今、夢を見ていた。又、会ふうぜ。きっと会ふ。瀧の下で」との言葉を残して、二十歳で死んでゆく。

その聡子との逢引の一場面。

清顕はどうやつて女の帯を解くものか知らなかつた。頑ななお太鼓が指に逆らつた。そこをやみくもに解かうとすると、聡子の手がうしろへ向つてきて、清顕の手の動きに強く抗しようとしながら微妙に助けた．二人の指は帯のまはりで煩瑣にからみ合ひ、やがて帯止めが解かれると、帯は低い鳴音を造らせて急激に前へ弾けた．

そのとき帯は、むしろ自分の力で動きだしたかのやうだつた。それは複雑な、収拾しやうのない感動の発端であり、着物のすべてが叛乱を起したのも同然で、清顕が聡子の胸もとを寛げようとあせるあひだ、はうばうで幾多の紐がきつくなつたりゆるくなつたりしてゐた。彼はあの小さく護られてゐた胸もとの白の逆山形が、今、目の前いつぱいの匂ひやかな白をひろげるのを見た。

聡子は一言も、言葉に出して、いけないとは言わなかった。そこで無言の拒絶と、無言の誘導とが、見分けのつかないものになつた。彼女は無限に誘ひ入れ、無限に拒んでゐた。ただ、この神聖、この不可能と戦つてゐる力が、自分一人の力だけではないと、清顕に感じさせる何かがあつた。

それは何だつたらう．清顕は、目をつぶつたままの聡子の顔がすこしづつ紅潮してきて、そこに放恣な影の乱れるのをまざまざと見た。その背を支へる清顕の拳に、はなはだ微妙な、差恥に充ちた圧力が加はつてゆき、彼女はさうして、あたかも抗しかねたかのやうに、仰向きに倒れた。清顕は聴子の裸をひらき、友禅の長襦袢の裾は、紗綾形と亀甲の雲の上をとびめぐる鳳凰の、五色の尾の乱れを左右へはねのけて、幾重に包まれた聡子の腿を遠く窺はせた。しかし清顕は、まだ、まだ速いと感じてゐた。まだかきわけて行かねはならぬ幾重の雲があつた。あとからあとから押し寄せるこの煩雑さを、奥深い遠いところで、狡猾に支えている核心があって、それがじっと息を凝らしているのが感じられた。

やうやく、白いい曙の一線のやうに見えそめた聡子の腿に、清顕の體が近づいたときに、聡子の手が、やさしく下りてきてそれを支へた．この恵みが仇になつて、彼は曙の一線にさへ、触れるか触れぬかに終つてしまつた。

◆ ユーモラスな表現。

『ノルウェイの森』　　村上 春樹　　100%の恋愛小説。

現在、三七歳の僕は、ハンブルグ空港に着くとき機内に流れるビートルズの『ノルウェイの森』を聞きめまいを感じる。それは、自殺した直子の「忘れないでね」との言葉を想い出させたのだった。

東京の大学に入学したぼく、ワタナベ君は自殺した友人の恋人直子と山手線のなかで偶然出会い、逢う瀬をかさね、直子の二〇歳の誕生日に結ばれる。が、彼女は精神を悩み大学を中退すると、療養所の『阿見荘』に入るが、同室のレイコさんの支援もむなしく自死してしまう。ぼくは、その間、緑の愛を得て立ち直ろうと旅に出る。放浪を終えたぼくのところに阿見荘を出たレイコさんが、旭川に転居する際に立ち寄り、直子の葬儀をすると共に緑との愛で自分を取り戻しなさいと助言し、二人は当然のよう……に結ばれる。

上野駅にレイコさんを送ったぼくが緑に電話するが、

「どこにいるの？」との緑の問いに、ぼくは受話器を持ったまま（ぼくは今どこにいるのだ？）と周りをみわたしたがわからず、緑を呼び続けていた。以下は、レイコさんとのセックスによる自己回復する場面。

カーテンを閉めた暗い部屋の中で僕とレイコさんは本当にあたり前のことのように抱きあった。

お互いの体を求めあった。僕は彼女のシャツを脱がせ、ズボンを脱がせ、下着をとった。

「ねえ、私けっこう不思議な人生送ってきたけど、十九歳年下の男の子にパンツ脱がされることになるとは思いもしなかったわね」とレイコさんは言った。

「じゃあ自分で脱ぎますか？」と僕は言った。

「いいわよ、脱がせて」と彼女は言った。「でも私しわだらけだからがっかりしないでよ」

「僕、レイコさんのしわ好きですよ」

「泣けるわね」とレイコさんは小さな声で言った。

僕は彼女のいろんな部分に唇をつけ、しわがあるとそこを舌でなぞった。そして少女のような薄い乳房に手をあて、乳首をやわらかく噛み、あたたかく湿ったヴァギナに指をあててゆっくりと動かした。

「ねえ、ワタナベ君」とレイコさんが僕の耳もとで言った。

「そこ違うわよ。それただのしわよ」

「こういうときにも冗談しか言えないんですか？」と僕はあきれて言った。

「ごめんなさい」とレイコさんは言った。

「怖いのよ、私。もうずっとこれやってないから。なんだか十七の女の子が男の子の下宿に遊びに行ったら裸にされちゃったみたいな気分よ」

「ほんとうに十七の女の子を犯してるみたいな気分ですよ」

僕はそのしわの中に指を入れ、首筋から耳にかけて口づけし、乳首をつまんだ。そして彼女の息づかいが激しくなって喉が小さく震えはじめると僕はそのほっそりとした脚を広げてゆっくりと中に入った。

◆ 軽やかに表現。

『マリコ／マリキータ』　　池澤 夏樹

文化人類学者のぼくがククルイリック島の宗教儀礼調査で、グアム島に立ち寄った時、ジェットスキーの看板の横に薄い水色のワンピースの水着を着た日本人の女を見た。三か月のククルイリック島での調査を終えグアム島に戻った時、偶然彼女、マリコと知り合い資料整理をするのに安いホテルを見つけてもらう。そのホテルに落ち着いたぼくは、彼女の誘いで付近の子供たちとのバーベキューパーティーや夕食をともにし、マリコとともに数日を過ごす。

帰る日が近づいたある夜、マリコは「シャワーが壊れているので貸してほしい」とぼくに言う……。

彼女はコットンの花柄のワンピースを着て、上気した顔で、シャワーから出てきた。

「ああ、暑いな」と言う。

「そんなもの着るから」

「だって、まさか最初から裸ってわけにもいかないよ」

「最初からって？」

「バカ、だまれ」

椅子に座っていた僕のそばに来て、ひじかけに腰を下ろし、顔を寄せるのかと思ったらいきなり濡れた短い髪を手でひっかきまわしてこちらの顔に水滴をかけた。うわっ、濡れるだろう」といったとたん、唇が重なってきた。何にも言わずに済んだと僕は安心し、その唇を味わった。見た目よりずっと厚みのある、熱い、重い唇だった。むっと暑い。まだ彼女の身体を包んでいるシャワーの熱気と水蒸気のバリアーの内側に引き込まれたのだった。

「ほら、シャワー浴びといで」長い長いキスの果て、ぼくの手が彼女の背中から少しずつ前にまわって胸に触れそうになったところで、マリコは顔を離してそう言った。それからの数時間の印象は混乱している。

マリコはひどく攻撃的になってこちらを上から押さえ込むかと思うと、次には甘えてまるまって腕の中に入ってきたし、ゆっくりやさしく腕をさすってくれながら、いきなり爪を立てたりした。時には泣くような声を立て、くっくっくと笑いをこらえて笑い、やせた身体と長い手足がよく動き、小さな乳房がふくらみ、シーツを蹴り、気が付くと黒い大きな目が間近に僕の目をのぞきこんでいた。

◆ 匂いたつエロチシズム

『忍ぶ川』　　三浦 哲郎　　昭和 35 年芥川賞

卒論を控えた大学生である「私」は、小料理屋「忍ぶ川」で働く志乃に好意を寄せる。

何回か通ううちに、二人がともに、深川と縁が深いことがわかり実現した深川での散策で、同じような痛ましい家族関係であることをさらに知ることとなり、思いは深まっていく。

兄妹の暗い血と戦いながらも、逞しく生き抜こうとする私には、哀しい宿命の娘志乃にめぐり逢い、痛ましい過去を労りあって結ばれる。東北の実家に帰り初夜を迎えた……

私は、はじめて、志乃を抱いた。志乃のからだは、思ったより豊かだった。ふだん、和服ばかり着ていて、着やせしてみえるのである。乳房は、にぎると、手のひらにあまった。肉はかたくひきしまっていたが、そのくせ、おせば、どこまでも沈んでいきそうな不安があった。皮膚はうすく、胸をあわせていると、志乃の血のたぎりが刻々とわかった。そうして、志乃のからだの襞という襞がうちがわから火にあぶられているようにあつく、私たちの全身はたちまちのうちに汗ばんだ。その夜の、志乃は精巧につくられた人形であった。そして私は、初舞台をふんでわれを忘れた、未熟な人形遣いであった。

（注）原文の旧仮名づかいはそのままにしてあります。